『星野君の２塁打』から広がる世界

有川淳一（小倉工業高校）

はじめに

筆者は福岡県立小倉工業高校の地歴・公民科の教員である。『星野君の２塁打』について書きためてきた論考がいくつかあり、今回の報告書へのお誘いをいただけたので、他の研究者や自分が今まで公表してきたものと重複する部分も多いが、再構成してお届けしようかと思う。今後の研究の参考になる部分があれば幸いである。

『星野君の２塁打』は戦前戦後に活躍した作家吉田甲子太郎の作品である。タイトルの「君」「塁」がひらがなになってしまったり、内容が書き換えられたり、最後の結末が削除されてしまったりと受難の作品だが、最近はこの作品が思わぬ取り上げをされて内容までが厳しい審判にさらされている。

作品の読まれ方、作者の意図、自分の勤める高校現場での実践を小文にして周囲に見てもらうなどした後、発表について働きかけをし、幸いにも２カ所から掲載の可能性のお話をいただいた。できる限り多くの方に読んでもらいたいと思い、１本の論考を加工して２つに分け、『福岡県公民部会紀要５４』(2020 年６月）に「道徳教材『星野君の２塁打』について」を掲載いただいた。高校教員が読む研究誌なので、研究史や作品の背景は簡略にし、高校で法、決まりを考える題材として実践した内容を記述した。一方で西日本応用倫理学研究会『ＨＡＢＩＴＵＳ』24 巻（広島大学文学研究科 2021 年３月）に掲載いただいた「道徳教材『星野君の２塁打』と高校での授業実践」については、大学の学生や研究者が読むことを意識し、高校での実践は簡略にし、逆に研究史、作品分析などを詳しめに書いた。後者はネットで読むことが可能な学術誌であるが、私の論考は同窓生のための別枠の扱いなのでその中に入ってない。2020 年、２０２１年１０月の福岡県高教組の教育研究集会（教科別）でも報告をさせてもらった。

論考で取り上げた『子どもの社会化と主体形成の両義性：教材「星野君の二るい打」の考察』(2017 年、『 奈良女子大学文学部研究教育年報』１４） の作者、柳澤有吾氏には小文を見ていただき、読解不足の点などを教えていただいた。

同じ時期に柳澤氏、功刀氏ら４名による「星野君」論集が 2021 年３月に刊行されるとともに、研究チームを作られ、数年がかりでこの研究を深めていかれる様子。筆者の拙い研究が偶然にもその露払いになったのなら光栄だが、「星野君」が少し世の関心を集めだしたのも確かである。2021 年夏に柳澤氏より、リモートでの報告のお誘いをいただいた。横浜国立大学の藤井佳世氏の議論倫理学からの「星野君」分析とのペアでの報告となった。その際に「テーマは『星野君の二塁打』とその周辺くらいの大きな括りで考えていますので、『星野君の二塁打』そのものずばりでなくても問題ありません」とのことであり、教育現場に近いところの実践的なお話ということで、私の授業での実践報告が中心となった。当初は、既に発表したものを聞いてもらうのも良いか、難しく考えずそれこそ「露払い」ができればいいではないか、と思ったのだが「その周辺くらいの大きな括り」という言葉に触発され、新

たに調べたことがあった。

（「星野君の２塁打」あらすじ）

甲子園出場を賭けた地区大会決勝、同点最終回裏無死一塁、この日打撃不調のエース３番打者星野（後に８番や５番の設定、更にはチームは少年団で郡大会出場をかけるなどの設定に変更される）が最終回の打席に向かおうとするがベンチに呼ばれ、送りバントを監督と主将から要請される。安打が（しかも長打が）打てそうな気がする、打たせて欲しいと反論するも、監督は確実な策であるバントを再度命じる。バントのつもりで打席に入った星野だが、走者や投手の様子を見、自分の勘を信じ２塁打を打ち、次打者の犠牲フライでチームはサヨナラ勝ち、大会出場を決める。しかし翌日星野はミーティングで監督から約束違反を責められ愕然とする。小学生の教科書などでは、この先の大会への出場禁止と謹慎を命じられたり、異議があるかを問われ「異存はありません」と答える場面がカットされているものもあり、カットは教科書編集に関わった吉野本人により行われたようである。道徳的な考察をさせようとする意図と考えられる。

さらに最近では、別人による加筆がなされた物も流布している。

1、この作品で野球を語るのはナンセンスである

この作品を「指導者と選手」論のせめぎあいに帰そうとするには、野球論として以下のように矛盾に満ちていて不適切であると考える。野球論で見ようとする矛盾点をあらさがしのようだが以下に挙げておく。

疑問１）

最終回の表に２点を返され、２－２の同点となり、一番苦しいのは投手の星野。勝つためにここでのバントをためらう理由はない。サインが出なくても、自分の判断でバントの構えをし、四球、バント安打、送りバントなどにつなぎたい場面。４番でなく３番打者が、当日打撃不調でそこまで打つのにこだわるだろうか。４番が信用できないだろうか。この日は三振２と死球１の設定（少年野球設定では７回裏、三振１、投ゴロ１の設定に変更される。）

疑問２）

監督がベンチに呼び返してまで行った指示にそむく選手がいるだろうか。当時やその前の中等野球、現在までの高校野球、甲子園出場を賭けた場面では考えにくい。小学生設定ならまあ適切か。（ただし似た局面でサインを無視して強打、三重殺、甲子園を逃したチームの例もある）

疑問３）

打てる気がするで、ヒッティングに出れるものか。凡打すれば監督やチームメイトに責められるのは必至。疑問の２、３、８などの考えから後に作者は、少年野球に設定を変更したかと私は考える。

疑問４）

２番打者は足の遅い設定ながら、盗塁を試みようとしきりにリードを取り、牽制に間一髪セーフ。そもそも２番なのに足が遅い設定、そしてサヨナラ勝ちの大事な走者が危険な盗塁を狙う不思議さ。投手を攪乱するためならありうるが、そうではなさそうな描写。サヨナラ勝ちの走者だから現在なら、延長戦の可能性に目をつむり、一番足が速いか、走塁、

状況判断の優れた代走を出す場面である。
疑問５）
　サヨナラ勝ち、優勝ながら、星野のサイン無視を星野がすぐ謝ったり、監督が責めるなどの場面がない。試合直後に表彰式などあるにしても、戦時、戦後の時代にしても監督がその日のうちにミーティングをしないなどあるだろうか。
疑問６）
　監督が翌日、星野のサイン無視を責める場面、これを全員を前にして行うだろうか、まず星野一人を呼び出して指導するだろう。
疑問７）
　エース投手をこの規律違反により登録しない決断は、当初設定ではエース抜きで甲子園に臨むことになる。少年野球設定でも、保護者、関係者から疑問の声があがらないだろうか。そういう反響を考えず決断できるか。反抗的で懲戒が必要な選手ではない。無邪気に指示を無視してしまった選手への罰としてあまりに厳しい。しかも甲子園で勝つチャンスを放棄するに近い行為である。
疑問８）
　ミーティングで一度は自分のことと思いながら、自分は結果を出した、責められるはずはないという都合のよい判断を旧制中学生、１８歳くらいの星野がするだろうか。

2 作品の背景にあるもの

小学高学年向けの国語、道徳の教材として、小学校で規則のあり方に関連して、この作品でどう教えるかという観点からの研究や実践例が多くあるが、後に触れるように作品をやや曲げて解釈してきた嫌いがある。功刀俊雄の２本の論文はこの教材を詳細に論じている。最初の論文『小学校体育科における「知識」領域の指導ー教材「星野君の二塁打」の検討(一)ー』(『教育システム研究』３号 2007 年）では、日本の野球では「指導者へ絶対の服従」を良しとする傾向があるとされ、この作品はその典型と見られてきた点を指摘。その上で功刀は日本の野球と、アメリカのベースボールの違いという観点から、この作品を見るのを間違いとする。この話のモデルと思われる事例はアメリカにあった。１９２３年に出されたアメリカ大リーグのマグロー監督の自伝に「バントのサインを無視して本塁打を打ち、監督から罰金を命ぜられた」ストラング選手の逸話があり、この作品は日米の違いを際立たせるわけではないと言う。この指摘は坂上康博『にっぽん野球の系譜学』（青弓社２001 年）でもなされている。同書は日本の野球の歴史の柱は勝利、人間形成、集団秩序であると説く。この中に上の指摘や、「星野」について別の言及があるので参考にされたい。なお功刀には少年向けの野球の読み物について詳細な論が別にあることを付言しておく。

功刀は更に吉田の過去の作品で「星野」につながるものがあることを指摘する。『一マイル競走』は、自分のレース結果が悪くなろうとも、相手有力選手を「引きずり」疲労させ、最終的に自チームの有力走者を優勝に導く役目を命ぜられた少年走者の話である。また『兄弟いとこ物語』の第３話中に、チームの勝利のため不本意ながら打ち気を我慢し、送りバントを成功させる少年の話がある。なお「一マイルレース」の作品のモデルがアメリカの児童文学にあるとする推測を功刀は書いている。そう匂わせた吉田の記述があるのだが、それを

吉田の虚構とし、否定的に見る見解も別にある。
功刀の 2 本目の論文『小学校体育科における「知識」領域の指導ー教材「星野君の二塁打」の検討（二）ー』(『教育システム研究』4 号 2008 年）は、「星野」のテキストの変遷、改変された部分、「道徳副読本」での作者吉田自身が記した作品意図や指導の目当てを説明し、最後に吉田の言う民主主義とはどう分析できるかが課題であるとの指摘をしている。

3、高校での試みと「指導者と選手の関係性」論議

功刀の指摘した、民主主義をどう分析するのかという課題に応えた論文が和田篤史「『星野君の二塁打』の道徳教材としての価値を再検討する― 高校２年生「法学入門」の授業において ―」(『立命館附属校教育研究紀要』３、２０１８年）ということができる。過去の実践例の分析、宇佐見寛のこの作品への批判を踏まえながら、この教材を高校生の「法学入門」で使い得るかという観点から野球規則と言う上位規則と、監督の命令という下位規則との関連、法治主義、法の支配、聴聞に対する異議申し立て、罪刑法定主義、などの関連で論じている。和田が論じた２０１８年は、日本大学アメフト部の不祥事が発覚した年であった。

監督が選手へ、相手選手を怪我をさせてでもプレーを食い止める指示をし、指示された選手がそれを貫き、相手に大怪我をさせ、社会問題となった。これに関連してこの教材が取り上げられ、監督の指示をどこまで守るのか、選手の判断のあり方を巡り、幅広く論じられた。例えばサッカー指導者が、「チームの約束事に従い無難なプレーをすれば、選手は責められないが、時に約束事を破っても独創的なプレーをするような自信を持つ選手でないと、発展性がないのではないのか」と「リスクをどこまで背負えるのか」を問う論である。またビジネスの場面でも上司の意向に反してでもベストの選択をしたつもりで動くが、後でその勝手な判断がばれて責任を問われるとか、そんな指示をした、しないで揉めることもあるだろう。

指導者優先絶対としか読めないと思えるこの話に、軍人経験のある人は新聞投書に「旧日本軍は政府統制に従わず、勝手に戦争を拡大した。そういうことを戒める民主主義的な教訓として読むべき」だとする。
それぞれ興味深いが残念ながら深読みし過ぎで、作品の本質からずれていると思う。

また初めてこの教材を本格的に批判したものとして宇佐美寛の１９７４年の論がある。これは星野に仮想的な抗弁をさせ、この作品の矛盾点を掘り下げたものである。承知した素振りで結果的に嘘をついたから悪いのか、それとも監督の指示に反したから悪いのか、監督の作戦が適切でないと思われる場合は監督の責任はどうなるのか、もしも相手の出方を見て、監督指示より高度な作戦を選手が思いついた場合はその実行が許されるのか、エース投手の出場停止でチームの勝つチャンスが減る迷惑を他の選手が受けるが許されるのか、などが論じられる。なおこの宇佐見の『「道徳」授業批判』は昭和の時期の道徳授業の教材をいくつか挙げて、それらの授業での扱いが一面的、単純でありすぎる点を厳しく指摘してお

り、今後の道徳の授業を考える上で大変重要である。

4、作品本来の姿（吉田甲子太郎の真意は）

このような批判がある吉田甲子太郎の作品だが、山本有三（「路傍の石」）、吉野源三郎（「君たちはどう生きるか」）などの流れに属する吉田は、二人同様リベラルな感覚を持ち、子ども向けの読み物を戦前戦後に数多く英文から訳し、また創作した児童文学者である。指導者絶対主義の論を振りかざす考えでなく「約束を自ら破った問題にどう向き合い反省するか」、民主主義と結びついたスポーツマンシップを小学生にひたすら問い、考えて欲しいがための作品である。１９４７年甲子園での大会が再開する年の夏、そもそもは甲子園出場を賭けて戦い、チームは甲子園にエース抜きでの出場を選択するという当初の設定は、タイムリーながら小学生に重すぎる命題のため、少年野球の設定に改編したと私は推測する。吉田の作品に野球は数多く出てくるが『甲子園の「第一予戦」で負けることになるかも』という単純な誤った表現にも、野球論の奥深さを追求する姿勢は感じられない。ポピュラーな野球の話なら共感を得られるかと取り上げてみたように思われる。

5「星野君」は何時の大会を描いたものか

フィクションのモデルをああだ、こうだ言うのも無粋な話だが筆者はアメフト事件のころに誰かがネットにあげた「星野君」を読み関心を持ち、当初アメフト事件にはあまり関心がなかった。この作品を知り、とにかくモデルが気になったのが作品に深入りした動機になった。今回この点を少し深めてみたい。この作品は 1947 年 7 月甲子園での大会再開を前に発表された。素直に解釈すれば 1947 年の大会予選か、前年西宮球場で復活した 1946 年の大会の予選が作者のイメージ形成につながったと考えるのが順当である。太平洋戦争中の１９４２年の大会は文部省主催で幻の大会となった。その前年の１９４１年は各地区予選実施中に大会中止となり、予選の記録がある地区、ない地区と様々である。更にそれ以前の大会も当然可能性としては想定できる。筆者の一方的な思い込みかもしれないが、作品の叙述が戦争が終わった明るさを感じさせ、戦時色深まる重苦しさを連想させないから、１９４２年より前は考察対象外と筆者は考え、４６、４７年を主に考察したい。

6、「星野君」は福嶋一雄投手か（余談として）

筆者は小倉工業高校に勤務し、２０２０年に野球部創立百年、甲子園出場９０年を迎えた小倉工業学校→小倉中央高校→小倉工業高校の野球部の歴史を研究し、野球部ＯＢにして体育学松尾順一元大学教授を共同研究者として現在野球部の本を編集中である。また昭和の終わりから平成の初めに隣の小倉高校に勤務した。戦前、夏、春の甲子園、現在のとは連続してない神宮大会に福岡県からすべてに初の出場を果たした小倉工業学校だが、戦後直後に小倉中学→小倉北高校→小倉高校が取って代わり、全国制覇を果たし、戦前の小倉工業の強かった時代を忘れさせてしまったのを感じている。

小倉高校の栄光は、道具が運良く残っていた、進駐軍が使用することを考え整備したグランドが、都合が変わり返還されたことなどに求められている。その通りかと思うが、連続の夏の全国優勝となるとこれは大投手福嶋一雄の功績あってのものと言わざるを得ない。「福嶋の行くところ優勝あり」と小倉高校、早稲田大学、八幡製鉄所に優勝をもたらし、1984 年からは日本野球連盟・九州地区連盟に関わり野球殿堂入りした人で、北九州市では何かあると福嶋、君原のお名前が語られる知名人だが、残念ながら 2020 年 8 月 89 歳で亡くなられた。1931 年生まれの福嶋氏は病弱なため周囲より一年遅れで小倉中学に入学。2 年に進む折、身体を強くしよう、柔道、剣道などの武道は進駐軍の禁止するところだから野球でもやってみようと入部。上の１９４６年の大会が西宮球場で実施された折はチームの一員としてより、部員の食事の材料の購入で闇市場を廻る役目を果たしたと伝わる。

翌１９４７年の春の大会では小倉中学３年で甲子園準優勝投手、同夏に優勝投手、翌４８年春の選抜は１回戦敗退、同夏の甲子園大会では小倉高校２年で連覇優勝投手、５試合連続で４５イニング無失点の甲子園大会タイ記録（海草中学嶋清一１９３９年）、４９年小倉北高校３年で準々決勝敗退の時に無意識に甲子園の土をユニフォームポケットに持ち帰り、甲子園の土の持ち帰りの起源となったことで知られる。（福嶋の学校名や学年、制度の変更時で興味深いと思うが説明は控える。）

私が「星野君」を福嶋か？ とするのは大エース福嶋が１９４６年西宮球場での復活全国大会時はまだエースでなく、闇市場での買物が役割であったことから「エースの地位が当然であるにも関わらずその扱いがされなかった」ことからのこじつけである。小倉中学は夏の全国大会２回目であったが、１回目は甲子園以前、２回目は甲子園大会復活前年であり、まだ甲子園には出場していなかった。

7、「星野君」は東京高等師範学校附属中学校若山投手か

１９４６年西宮球場での附属中学の様子は『「甲子園の土」ものがたり』（明治書院２００９年三浦馨 著、竹田晃 監修）に詳しい。４５年東京大空襲前後も猛練習を続け、小石川区大塚の校舎が焼失する中で大会初出場、監督は早稲田大学野球部在籍ＯＢ、海軍予備学生として出征し横須賀海兵団で終戦を迎えた佐々木迪夫、予選６連投のエース若山は疲労困憊で発熱、注射を打って決勝３－２の接戦で強豪都立一中を破り、東京の公立では初の甲子園出場を決める。甲子園でも小倉中学、松本私立中学を破る予想外の連勝。松本私立中学との試合の日は宿舎で現金、時計が盗まれる盗難にあう。準決勝で浪華商業・平古場投手に敗退。試合終了後に佐々木監督は「５年生以外の選手は自分のポジションに行って土を取ってこい。来年に返しに来ようじゃないか」という指示をし、４，３年生６人がその指示に従い、朝日新聞にも取り上げられ、４年の竹田晃選手はこの件の作文を勧められて書き、担任長谷川がこの文章を大幅に作り替え、これが中学３年生の教科書に載ることになった。捲土重来を期す内容が、チームワーク欠如の反省、相手への祝福と大幅に作り替えられていて、竹田は長谷川に猛抗議するも受け入れられなかった。２０２１年１０月９日の研究会で功刀氏

より、今も東京の大塚に附属中学が残る、担任長谷川も「文部省職員録」で調べがつくと思われる、上の福嶋投手の件は混乱を招くから語らないが良い、という指摘を受けた。また東京高等師範学校附属中学は東京都の公立中学から甲子園への初出場、大学生監督（決定版の別府さん、初版では大学生でなく今井先生）など星野君のＲ中學との共通点は多い、という推測も少し甘いのではないかと功刀氏よりの指摘。今後の課題である。

中学生たちの少し年上の先輩で大学生佐々木が監督になる経緯やその後の部員との深いつながりが『「甲子園の土」ものがたり』に詳しく書いている。教科書とのつながりまで後に生じる。吉田甲子太郎は東京に住んでいて、東京都公立からの初出場、劇的な戦いぶりの新聞報道からこの学校に注目し、「星野君」へのイメージ作りにつながったことは大いに考えられる。三浦馨氏や竹田晃氏周辺の調査を進めると更なる発見も考えうるのではないか。平古場投手は阿久悠 氏の「瀬戸内少年野球団」へ影響を与えたことで知られる。

8、R中學は芦屋中学かあるいは

西宮、甲子園の地元に近い芦屋中学は野球部創部から１年を待たず全国初出場を果たし、この時の記念ボールを今に伝えている。更にこのドラマティックな出場を分析すると「星野君」につながる要素が見つかることが考えられそうである。上に説明した１９４６，４７年の両大会には初出場校が他にも幾つかある。詳しい調査をすれば、芦屋中学のような要素、「星野君」「Ｒ中學」につながる要素の発見が期待できる。附属中学も含め交渉を深める必要がある。

9、甲子園の土と「星野君」

６，７の考察に偶然のように甲子園の土が出てきた。甲子園の土と言うと福嶋以前の戦前の熊本工業・川上哲治の話もある。川上は甲子園の土を、熊本工業が練習場にした水前寺球場にまいたと伝わる。また川上以前にも持ち帰る選手がいたと川上は語ったという。甲子園から選手が持ち帰るとなると意識的、無意識的にも土が確かに考えられるだろう。

川上は１９５１年アメリカに派遣され、アメリカでの野球の監督が選手と対等でなく、絶対的な立場であることを学び、帰国後に水原監督への態度を改め、大変に協力的になったという。アマチュア野球とプロ野球と違うところも多かろうがこの逸話も「星野君」を考えるうえで重要な視点となりうるかもしれない。

「星野君」の話を聞くとつい星野仙一さんが連想されるという。監督の指示に葛藤する星野君と、豪放磊落なイメージがある星野仙一さんと全くイメージがつながらない人も多かろう。星野仙一はこの作品が生まれた１９４７年生まれ、不思議なつながりである。星野が監督をした阪神球団は、２０２０年タイガース選手会の好意で、夏の甲子園への出場が断ち切られた全国の野球部３年生に甲子園の土を届けた。しかしこれがネットオークションで売られてしまう残念な事件が起こった。今後これについても道徳的な考察が可能かもしれない。

10、柳澤有吾の2017年の指摘

吉田の問いかけにストレートに対し、深読みをせず、しかしながらルール、約束の本質を論じるのが柳澤有吾『子どもの社会化と主体形成の両義性：教材「星野君の二るい打」の考察』(2017 年、『 奈良女子大学文学部研究教育年報』１４）である。柳澤はうっかり不注意で、あるいは自分本位でルール違反をすることを揺さぶるような実践と、この作品の食い違いを指摘。星野は未熟ゆえに、チームの約束事や監督の指示を「乗り越え可能」と考え打ってしまった、その点に星野の未熟さがあり、監督の諭しで星野が自分の間違い、約束や協同（共同）精神の大切さに気づいたとする。柳澤は「規則に従うことの大切さ」は確かにこの作品で教えうるが、民主的な主体者として「ルールを自分たちでいかに作り変えうるか」という視点が、この作品やその実践で欠けていることを課題としている。

11、授業実践に向けて

2019 年段階までの筆者の考察を読んでいただき、様々な感想、例えば戦国時代の「抜け駆けの軍功」に対比する面白い見方もお教えいただいた。報告で紹介した柳澤氏からは懇切丁寧に、理解不十分な点などの指摘と励ましをいただいた。また私以上に道徳に向き合う必要性を感じている友人のお二人からは、その考えを様々に述べていただいたので少し紹介したい。筆者の力不足ゆえに三者の指摘を十分理解できず、曲解していたらお許しいただきたい。

当時小学校長の友人からは、進行している道徳の教科化への様々な疑問をお示しいただくとともに、生徒が割とレベルの高い学校のようで、校則のようなものはあまりなく、必要があれば生徒とともに考えるようにしているとのこと。宇佐見氏の示した例に出てくる、星野の仮想反論の例は、大学生レベルでも発言するのが無理な高度なレベルではないか。道徳教材が規則、ルールなどの価値観を教えていく側面ばかりが大事にされているが、子どもたちを民主的な主体の形成者として、世の規則を問い直す、作り直すという視点を考えさせる側面が欠けているのではないか、などの指摘をいただいた。

倫理学、教育哲学を専攻する大学教授の友人は、近隣の小学校で道徳の授業を見学するような経験もあり、小学校段階で宇佐見氏の示すような、分析、批判、反論の例を考えさせるのは、発達段階を考えると問題であり、勉強の出来が良いが意地が悪く、陰湿ないじめをするような傾向を助長するのではないか、小学校段階では共感や寛容を育成すべきではないかとの指摘であった。

12、有川による高校での実践例。

２０２０年２月に担当する工業高校１、２年４クラス（３８～４０人、総計１５７）で１時間づつ授業を行った。「決まり、ルール、約束について考える話だ」と予告し、まず原作（監督が制裁を予告したところから後はカットした１９４７年原作・Ａ４裏表）を配り、続いて以下に示す設問に答えていく方式であった。２年の１クラスはマイペースで読みたい

という意見表明があったので、このクラスはあらすじを説明しなかったが、他３クラスはあらすじを説明し、指示と説明を細かくしていった。先の１クラスは学年末考査直前の、試験関連授業を期待していたためか反応が冷たく、ささっと雑に済ませて教科書を復習している生徒も数名以上見られた。

「この話を読んで順番に１行で良いので飛ばさないで答えていってください。」とまず断り、「１、星野君の約束違反についてどう思いましたか」という設問を示した。「星野が間違い、悪い」というニュアンスの反応は、７２人４６％、「２、監督の考え方についてどう思いましたか」で「間違っている、疑問あり」の反応は３４人２２％。

「３、あなたはこのチームの主要メンバーです。皆が何か言ってくれよという顔で、あなたの顔をうかがって、意見を求めています。どういう意見を言いますか。」というのには「制裁に反対する」などが少し見られた。

「４、結末がわざと書かれていません。星野君はどうなるでしょう。そしてチームはどうなるでしょう。」ではやはり星野謹慎、欠場などが多く見られ、逆にチームが結束、甲子園優勝という答えも少し見られた。「５、あなたが予想した結末になりました。あなたはチームの主要メンバーです。あなたはその後にどういう行動を取りますか。」は予想する結末が様々であったため、回答は分散し「頑張る」などの答がやや多く見られた。

ここで「回答プリント裏面の下に書いてある結末を読んでください」と謹慎、出場禁止の制裁と「異論はない」という星野の表明を読ませた。そして「６、作者が初めに考えた結末を聞いてあなたはどう思いましたか。」では制裁の厳しさに驚いたり、予想通りだが残念という答えが目立った。

そこで「７、あなたはチームの主要メンバーです。星野を謹慎、欠場させると聞いてどうしますか」とか「８、あなたは星野君です。この後にどういう行動を取りますか。」という設問でも答えは分散したが、「星野のために撤回を求める」「先生に謝罪してチームを支えるために裏方で頑張る」など、両方もしくは片方が前向き傾向の回答は、３クラスでは１２８人中４１人３２％、１クラスだけは３９人中３３人８５％と高い傾向を示した。

また「チームを辞める」という回答は２年生両クラスで４人１０％、５人１３％と出たが１年生にはなかった。

「９、 あなたは監督です。 この後にどういう行動を取りますか。」では星野とよく話す、練習に打ち込む、新たな布陣を考えるなどの回答があった。

「10、あなたは校長先生です。この話を少し離れた場所で全部聞いていました。この後にどうしますか。」という設問には「厳しい処分について説明を求める、撤回させる」と何らかの介入をするのが７８人４９％と概ね半数出ていたが「話す」が多く「撤回させる」とまで言い切っているのは少なかった。また監督を更迭が２人の他に、星野のケアが９人６％、部員の心のケアが５人３％見られた。

「11、あなたは星野君の保護者です。夜に結末を子どもから聞いて、どういう行動を取りますか。」では「監督などに苦情を言う、撤回を求める、話す」などが６６人４２％、「監督に謝罪」が２人１％で、「子どもを慰める、励ます、頑張らせる、反省させるためによく話す」などが半数近く見られた。

「12、この話は戦後に甲子園大会が復活した時に、甲子園を賭けた決勝戦として描かれました。しかし作者はこの話を小学生の国語の本に載せるために、町の大会に設定を変えました。このことについてどう思いますか。」には「よくわからない」や「どちらでも良い」が多かったが、「話の重みが違うから変えない方が良い」「小学生に身近でわかりやすいから良い」も多く見られた。

「13、校長先生が話を聞いてやってきました。監督の考えはわかるが、是非甲子園で勝ってもらいたい。甲子園が終わるまで、校長がこの問題を預かるから、今まで通り頑張ってほしいと言っています。校長先生が『〇〇君、それがいいと思わないかい』とチームの主要メンバーのあなたに言いました。何と答えますか。」では安心したように「ありがとうございます。そう思います」が多く見られたが「野球部の問題です。」「お気持ちはありがたいですが、監督に従います」などの介入を嫌う答えが３クラスでは２４人２１％、1年生の１クラスは１５人３７％見られた。この１クラスは４クラスでは一番前向きに取り組んでいる印象があった。そこで次の時間に回答の分析の話などもしてみたが、そこではあまり前向きな反応ではなかった。

「14、あなたは星野君です。13 の流れで皆があなたが何と言うか顔を見てます。どうしますか。」では「皆に謝って出場させてもらう」などの回答が多く見られた。

「15、あなたは監督です。13,14 のように話が進みましたがどうしますか。」では「皆の意思をよく確認」「約束の星野への再確認」などが見られたが、「取り消さない」、「監督を辞める」も少し見られた。

続いて宇佐見の論に見られたような星野の反論を３つ示した。

「１６Ａ、校長先生の気持ちはわかりました。でももう一度チームのみんなで考えさせてください、と監督が答えて、もう一度ミーティングが始まりました。星野君が、監督は『皆の意見を聞いてルールを決めていったとか、星野君異存があるなら言ってくれたまえ』なんて言ってますが野球の世界で僕らが監督の気持ちに反した意見を言えるわけないじゃないですか。僕は監督に従いますけど、皆の意見を聞いて決めているんだというような嘘だけはやめてください。』と言いました。どう思いますか」では強引な設定に戸惑う反応が見られた。「正しい意見」という反応も多く見られたが、３クラスで２９人２５％、先の１年生１クラスでは１７人４３％と、約束を破りながら反論する星野への反発が目立った。

「16Ｂ、星野君が、僕はわがままで、良い所を見せたいと思って打ったのではありません。何とかチームに貢献し、勝たせたかった、練習してきた成果を発揮できる自信があったんです。僕が間違っていたことはわかりました。でも野球のルールには各チームは、相手チームより多くの得点を記録して勝つことを目的とする、というのがあります。エースの僕を欠場させるのはこの『野球チームは勝利をめざし戦う』というルールに違反します。勝利を目ざすため欠場、謹慎はやめてくださいと言いました。どう思いますか。」は、先の１６Ａより反論が強引に受け取られ「エースと自分で言うな」「筋違いだ」などという反発が目立ち、当方の設定の抜かり、工夫不足が露呈し、星野に反発する回答が３クラスで３８人３２％、先の１年生の１クラスで２３人５８％見られた。

「１６Ｃ、星野君が『統制を守る、協同の精神、よく分かりました。でもずっとその

ままで、監督の考えに従うことが第一だと、試合の流れや相手の状況を考えるよりも監督の顔色を気にしてプレーすることになります。自分で状況判断をする訓練はしないで良いのですか』と言いました。どう思いますか」では先の２問ほどではなく、「間違ってない」などの反応も多かったが、「話をすりかえている」などの反発が４５人２９％見られた。

設定が強引な反論３問だったし、５０分の時間の終わり近くで、ささっと３問とも「正しい」と書いたようなのも目立っていたが、「その反論もそれなりに正しい」と理路整然な星野の反応に驚きながら、それを認める回答も多く見られた。

最後に「約束、ルールを破った経験やその時の気持ち、この時間の感想」を求めると「怪我で陸上の試合を欠場するように言われたが、自己ベストを出せた」とか、「集団競技で作戦を破り負けた（勝った）。先生に悪いと思った」などテニス、バスケットなどでの素直な感想、２年生では「試験前の時間、テスト対策の授業をして欲しかった」も１人づついたが、「初めは仕方なくやっていたが、野球の話だから意外に面白かった」「約束、ルールをもう一度考えるきっかけになる」などの好意的な回答も目立った。

高校生向け５０分の内容ではまずまずの流れが作れ、通常の教科書に添った授業よりもむしろ真剣に取り組むような様子も見られた。しかしこれこそアクティブラーニングの少人数グループ学習が効果を上げうることも想定される。クラスの女子は数名で残りは男子なので比較的野球にも理解があり、「話は理解できる」と机間巡視で多く答えるもののの、先のマイペースで読みたいクラスなどはＰＣゲーム好きで運動が苦手、野球は知らないと思わせるような生徒もいて「話がわからない」という反応も少し見受けられた。

１～１５の設問で生徒が話の中の人物として考えることにより、真剣に問題に取り組む効果は生んだが、いささか多すぎた感じがある。高校生としては１５ａ、ｂ、ｃの設問により、民主的な主体としてルールを自らが作る、考えるようなテーマに向き合わせるのに時間をかけるような工夫が次に必要になっているかと思う。

13、「星野君」最新研究動向

私の文章が二誌に掲載されたのと同じ時期に、功刀、柳澤ら４名による「『星野君の２塁打』を読み解く」という論集が 2021 年 3 月に刊行されるとともに、研究チームを作られ、数年がかりでこの研究を深めていかれている。筆者がこの著作を紹介、批評するのは僭越と承知するが、関心のある方に資する部分が少しでもあるかもしれないと考え、記すこととする。

第１章の功刀俊雄は「星野君」の研究に先駆的に取り組まれてきた成果を更に一般に分かりやすく、特に作者吉野氏の諸作品分析から、作品の背景を明らかにされている。

なお２０２１年７月５日の朝日新聞の書評記事において功刀は、「この作品を今使えるかというと古すぎる」「組織として競争に打ち勝つという叙述は帝国主義的なにおいがする」「『正しい大人』に『ついてくる子ども』という前提はどうか」「他人の考えを鵜呑みにする

のでなく、自分で考えるという、『メディア リテラシー』を問うているのが、今回の編著作である」という指摘をされている。

最後の指摘は２０２１年６月１４日に、この著作の書評を日本教育新聞に書かれた亜細亜大学大久保俊輝氏の「(星野処分にすっきりしない) その意味では、児童、生徒に質問をするのなら、教師自身が答えを持って臨むべきである」という指摘に通じるものを感じた。

第２章の米津美香は文学的な分析を交え、テキストの改変、特に１９８３年日本書籍による再構成により、終わりの場面が、監督による星野謹慎の指示、じっと動かないナイン、涙をこらえ一人考える星野の「 ー 勝つためにきそくを守らなかったのはいけないことか。 ー きそくをまもってさえいれば、負けてもよいのか。 星野の心には、二つのことがこんがらがって、わからなくなってきた。」という結末が紹介され、他のテキストとの比較がされている。功刀もかつて終わりの場面を省略してしまったことを「悪しき改竄」と指摘したが、私の見方も、作者自身による省略ではなく、再構成により別人が書き換えている点、教育的な意図とは言え愕然とせざるを得ない。再構成により、学習者に葛藤を追体験させる教育効果を生むが、作品の持つ広がりや多様性が矮小化してしまうという指摘を米津はする。そしてこの例を受けて教科化された道徳についての考え方を幅広く示している。(授業に著作権の考慮は不要だが、教科書編集ではどうだろうか)　　第３章の天ケ瀬正博は二つの道徳論の混合、それによる道徳教育の混乱、「犠牲」について考察をしている。

第４章の柳澤有吾はアメフト事件に関わる「星野君」批判、坂上康博著作に出てくる大学生による「星野君」批判などについて、それらが一面的であること。「犠牲」を強いられる不当を論じる者には、この言葉に過剰反応が見られる、星野が犠牲を強いられるのは単なる役割、作戦に過ぎないこと。宇佐美寛や和田篤史の論での「監督の独裁」、「処分の不当」という見方が一面的であること。これらの批判は「星野君」を読み取る視点が、あらかじめ設定された外在的なものであり、このように様々な視点から読み取れる「星野君」が開かれた読み物であること。しかし作品に対して素直に内在的に読むことがもっと許され、積極的に要請されるべきだとする。

上に書いた内容も２０２１年１０月のリモート報告の資料には書いておいた。その後、２０２２年１１月に再度、「星野」リモート報告会が行われた。報告者からの報告内容が別途、この報告書にも出されるのではないかと想像されるが、功刀氏の報告がかなり心に残ったので、そのことを書かせてもらいたい。

功刀報告はベーブルースの逸話やそれを伝える読み物についての報告であった。その報告の中で、「創作であると思われるが」という前提で、「星野君」の話に似た少年時代のベー

ブルースの逸話が紹介された。その中に「みんなのために」というタイトルの作品がある。この名前は、かつて「星野君」を授業で実践した小学教員などの報告でたびたび目にしたもので、「星野君」が小学校の国語教科書で扱われている時に、道徳副読本に掲載されていたもので、「星野君」の補助教材として活用されていたのではないかと推測されるが、「みんなのために」というタイトルは授業テーマなどでも使われそうな名前なので、よく見極める必要がある。

ベーブルースはホームラン王として、よく知られた人物であり、近年の大谷翔平の二刀流の活躍に関連して、大リーグの二刀流元祖として最近再びよく語られるようになった。しかしながら現在ベーブルースの伝記や漫画は、日本では新しい物が出ておらず、古本でしか探せない状況である。アメリカや日本でベーブルースはどのように伝わっているのか、そしてその逸話はどこまで事実を踏まえたものであるのかは、今後も考察の余地が残っていそうなのを、功刀報告から感じた。

佐山和夫のベーブルースの大人向けの伝記『それはパンデミックから始まった』では、タイカップ選手に代表される、それまでの短打、守り、真面目な野球が、ベーブルースにより、本塁打、攻撃、楽しい野球へと変化したことを指摘している。ホームラン量産もさることながら、ベーブルースの野球を楽しむ姿勢が、ファンの共感を呼び、ホームラン量産以前から、ベーブルースは高い人気があったという指摘であり、上の伝説、逸話ともども、これからの更なるベーブルース研究を、「星野君」につながっていくものとして期待したいと思っている。

14、余談ながら「星野君」研究と、本校野球部について

２０２２年度、私の勤務校の野球部は、春の選抜に同じ北九州市内の九州国際大学付属が出場している留守中、九州大会福岡県予選で準優勝し、久々に宮崎県で開催された九州大会に出場しました。夏の県大会でも公立では唯一、福岡県ベスト４まで勝ち残り、久々の好成績で関係者は沸き立ちました。この時に新聞報道の話題作りにかなり貢献、これは周囲の注目を集め部員の士気を高めるために、話題提供をした監督の作戦ではないかと思います。

九州国際大学附属との準決勝、相手側に走塁の判断ミスによる本塁憤死があり、対して本校は３塁コーチに徹している選手の適切なコーチングで点を挙げ、序盤のみですが優勝候補相手にリードを奪いました。エースの力投ともども、これが最後の話題提供になりました。

それ以前に話題になったこととして、一年前の夏に主将選考に迷った監督は、部員たちに、立候補を求め、公約を作らせ選挙演説、投票、更には漢字で適切に記名できなかった票を無効にしたこと、選ばれた主将の熱血ぶりが報道されました。主将選出を部員の選挙で行うこと自体はそう珍しくないかもしれませんが、１８才成人という政策の施行に合わせ、かつ公約、演説、選挙管理までも本格的に行ったことが話題になりました。

春の快挙の時に続き、夏でもノーサイン戦法が新聞に取り上げられました。何も全くサイ

ンを出さないのでなく、
「監督にいきなりサインにより命じられる作戦よりも、自ら考え実行する作戦は成功率が高くなるのではないか」という考えに基づいて、選手たちの裁量で行う作戦を一部認める」という「やらされる野球から、自らがプレーの選択肢を考える」というものなのではないかと考えます。

15、演劇の「星野君の二塁打の別府さんとその妻」について

筆者は特段演劇に詳しいわけでもないが、「星野君」の考察の一環で、「戯曲デジタルアーカイブ」というホームページに上記作品の台本が掲載されているので紹介したい。これによると作者は劇作家くるみざわしん、上演時間目安６０－９０分、演者人数は男女各１人、実際に２０１９年5月２２日に吹田市のメイシアター・小ホールで二度上演、相可文代（元教師)、くるみざわしん二人によるアフタートークが各回の後に行われている。出演は南澤あつ子、宮村信吾で宮村は演出も兼ねている。また制作は劇団ＥＮとなっている。台本はＡ４用紙４５枚分である。この演劇はこの夫婦の住む家において、二人の会話と電話で展開される。「星野君」では別府さん、とだけ出てきた監督は別府聡５２歳、その妻美樹は５０歳、二人は吹田市もしくはその近くの町かもと思われる、やや閉鎖的な町に長く住んでいる。養子になった聡は少し前まで妻の両親と同居していて、その土地、家屋をそのまま引き継いだ様子である。またＦＡＣＥＢＯＯＫ、ＬＩＮＥ、ＴＷＩＴＴＥＲが劇の重要な要素として出てくるので、上演された２０１９年かそれに近い時期のドラマとして描かれていることを思わせる。しかし電話での会話は固定電話であって、携帯電話の使用は出てこない。

（１）第一景について

地区決勝戦が終わった夏の日の夕方、先に帰宅した聡はリビングで昼の試合を思い出し、わざわざ目の前に用意した麦茶も飲まず考えに耽っている。

美樹は勝利を祝い、わざわざ少し離れたヤマトヤのグラム３６８円和牛、夕刻３０％引き、二枚１３００円未満を購入して帰って来る。つまり３００ｇ９００円程度のステーキの５００円引きのため１６分程度自転車をこぐことを選んだのである。スーパーいなみ屋（肉は良くない）の食材調理のパートで働く美樹の時給は９６０円。

美樹は４時前、星野（ほっぺたぽちゃぽちゃ、目がクリっとしている）の２塁上のガッツポーズの写真を同僚藤木から見せられていた。聡が監督をしていることは美樹は語っていなかったし、藤木も野球に興味などないように思えていたが、小さな町ではこういう情報も知れ渡っている気配である。ステーキ購入は同僚黒田が勧めた。黒田もＲ町の野球チームに子どもがかつて在籍したので、別府の監督ぶりを褒め、喜んでいた。黒田は試合展開もＳＮＳで把握していたようで、星野にバントをさせずに打たせた采配を評価している。

美樹は聡がバントの指示を出しそれが無視されたことに怒っているのにようやく気づく。聡は地区の老人が監督をし、常に１回戦負けだったチームがようやく自分の努力で強くな

ったことを自負している。またその努力が妻の両親や地域へできるささやかな恩返しだと思っている。聡はこの四年かなりの努力をしてきた。

美樹はサイン無視に怒る聡に、星野の出場停止を勧める。出場停止にクレームが来ることを恐れる聡に、美樹は星野の父が三年前に移住してきて市の斡旋で花を作り売っていると伝える。

（2）、第二景について

翌日聡は昼のミーティングで、サヨナラヒットとなった二塁打は、チーム、地区の人たちや保護者たちの信頼、約束も裏切ったことを言い聞かせていた。電話で星野の父へ「野球も教育の一環で助け合い、自己犠牲を教えないといけない」ことを力説した。

今日も遅れて（23 時すぎか）帰宅した美樹は、昼のミーティングの内容が保護者のツイッターで流れ、聡の株が上がったことを説明する。夫妻は「骨のある監督」、「それを支える貞淑な妻」として、わざわざ惣菜部部長大川、レジ長三橋、総務部権藤、フロアディレクター松木らが美樹の顔を見に来て「これが骨のある男の貞淑な妻か」と羨ましがってた様子。また星野父は市長につながりが深く市議選挙に立候補予定、Ｉターン事業でも、市長とのつながりで良い思いをしている。そして北高校、市役所職員上がりの原田市長は意外にも星野家の肩を持たず、聡を「厳罰お見事」とツイートしていた。市役所改革にこの話を利用するかに思われた。

（3）第三景について

星野母が美樹に謝罪の電話をしてくる。美樹は聡が小心、生真面目に監督に打ち込んでいることを説明する。

聡が早い帰宅、市長から電話があり、市の広報誌に市長、聡の写真を出し、工場の記事も出すために市役所に行く。身づくろいをするために帰ってきた。野球の決勝大会開会式に市長も臨席する。その時にバント、処分の件を紹介したい。星野家の了承も取っている。

美樹はこの話と、先程の電話の関連を考える。市長のスピーチにこの話を使うために原田市長が星野の母を使い、美樹が聡に断らせないよう、美樹への根回しをしたのではないか、星野家は妻の方が市長とつながり、主導権を握っているのではないか。又開会式には星野君は市長の横に臨席するのではないかと。そう考えている時に、美樹はテーブルに黄色い花の幻を見る。その花はすぐに黒く枯れていく。そして星野君の笑顔までが見えてくる。

（4）第四景について

決勝戦の朝、聡は寝ずにユニフォーム姿で作戦を考えている。3 時に星野君は首吊りをした。父は不在、母が救急車を呼ぶも絶望的。4 時に美樹が起きてくる。経過を話し、聡は自分を責める。美樹は自殺は星野の弱さ、聡のせいでない、聡は怒りで処分を決めたのでなくチームのため、星野のために冷静で愛情ある指導をしたのだと、建前を貫くよう諭す。市長

秘書室の近藤から星野君が亡くなった連絡が来る。
　決勝大会は予定通り行われるという。

（５）第五景について
　美樹が丸山の電話に応えている。聡は聞いている。試合は一番打者が振らずに三振。二番打者がボックスで泣き出したのがチーム全員、相手チームにまでに伝染した。聡が試合放棄を審判に伝え試合は終わり、観客は拍手を送った。原田市長は開会式に出ないで、副市長にありきたりのスピーチをさせていた。
　原田は前日星野君に「来賓席で一緒に試合を見よう。バントが決まったら拍手をしよう」というメッセージを星野の父から渡していた。星野君は嫌がると、普段子どもを殴るようでない父は殴った。星野君は、「優しい聡はサイン無視を気にしないで、よくやった星野君と褒めてくれる」と思っていた。 父は、別府監督は優しくない。市長の言うことを聞かなかったら怒るに決まっていると星野を叱り、星野は部屋に閉じこもった。　美樹は、真相が明らかになり、聡が責任を認めると、聡だけでなく、市長や星野父も窮地に陥ると、聡を諭す。
　聡は社長、工場長、地区の人からも野球を、監督を辞めないよう諭されていた。
　聡は野球をもう辞めたいがユニフォームの脱ぎ方が分からない、自分と星野はユニフォームでつながっていると言う。しかし星野に甘えてはいけない。この町でひっそりと生きていくしかないのだと諭され、聡はユニフォームをゴミ箱に入れシャワーに行く。　　美樹は黒田が見た夢の話をする。「星野君の二塁打」という話が載った教科書で道徳を教える国がある。その教科書の中で星野君は別府監督になって生きている。ゴミ箱の聡のユニフォームは、いつの間にか星野の背番号８になっていて、浴室からはシャワーの音が聞こえてこない。

（６）「星野」原作と台本
　原作が教育、建前の世界であるなら、台本は限りなく本音、現実の世界である。台本の特徴として、原作には出ない別府妻を自由に描写して、台本独自の世界を作っている。この妻の存在が大きく、台本の主人公と言える存在感を発揮する。ここでは彼女が、星野処分の決定者である。また台本の舞台は閉鎖的なＲ町。夫妻はこの町に長く住む、町の主のような存在であるが、そこに更に原作には出てこないＲ町のドンのような存在である、市長の存在があり、彼の動きに夫妻や星野家族は大きな影響を受ける。筆者は演劇、文学に不案内で、特に第三景の黄色い花の意味や、聡と星野が異次元で一体化する意味がまるで分からない。何かを象徴する大事な描写であろうから、他の見解を聞きたいものである。